

何のために私は生きるのか？

Для чего мне жить?

—ロシア文学を通じて生を考える—

伊藤 学

北海道大学 大学院文学院

欧米文学研究室



未来社会のあるべきかたち

- ◆ 自らの生きる理由を意識するきっかけに
- ◆ 「よりよい人生」の在り方について考える

【私の専門について】

ロシアの作家**ミハイル・アルツィバーシェフ（1878-1927）**の研究
⇒彼の作品内で人間の**「生」**や**「死」**がどのように描かれるのか？

【アルツィバーシェフ作品の特徴】

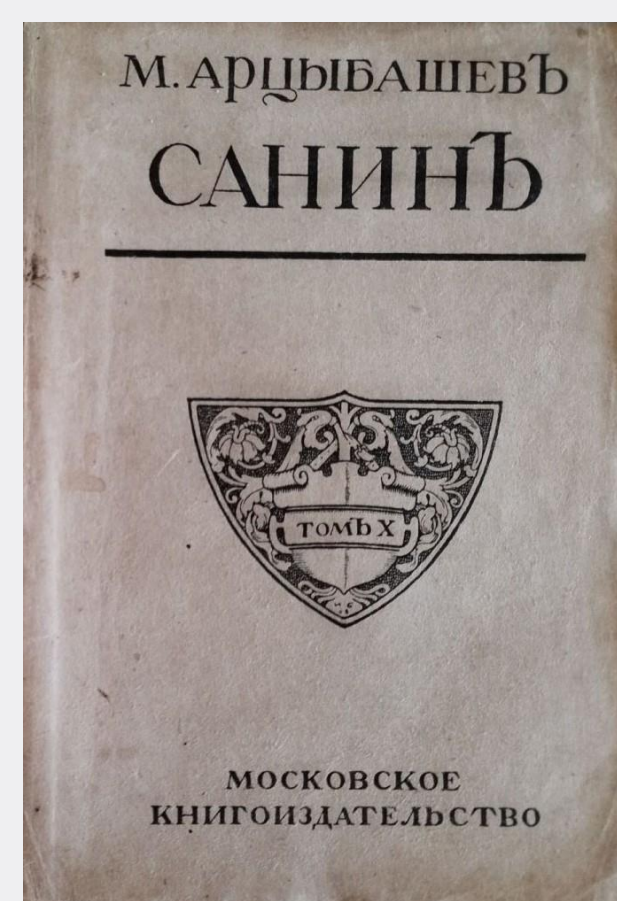
- 「生きること」に向けられた関心
⇒生の喜びや死の恐怖など、個人の感情や感覚に注目
- センセーショナル（煽情的）なテーマ
⇒暴力や性愛、殺人や病などの「刺激的な主題」を扱う
- ロシア国内外で**爆発的にヒット**
⇒1900年代～30年代にかけて世界中で読まれる
日本でも大正～昭和初期にかけて流行



Михаил Арцыбашев
(Mikhail Artsybashev, 1878-1927)

【アルツィバーシェフが考える生の在り方】

- 『サーニン』（1907）
…自由恋愛を通じた刹那的な享楽の追求
身体的な快楽に基づく生の肯定
- 『最後の一線』（1910-12）
…人間は存在する限り苦しみ続ける
本質的に生は虚しい、死は不断の苦痛を解消する手段



代表作『サーニン』
「アルツィバーシェフ選集（1917年、第10巻）」より

⇒人生の意味は**「今、この瞬間の歓び」**を主観的に感じ取ることで獲得可能。一方で、生に退屈や苦痛を感じる個人に**「生きることを強制」**する権利は誰にもない。

「自殺の流行」『作者の手記』（1912）より

【アルツィバーシェフ文学を研究する意義と注意点】

- 彼の作品における主要なテーマ「いかに生きるか」や「生の苦しみ」などは、**今日の私たちにとっても切実な問い**。
⇒単なる過去の創作物としてではなく、時代や場所を越えて、考えるための材料を提供してくれる。
- 人生の意義や目的について作品内で語られる際、著者の主観が強調されている点に注意。
⇒特に彼の**厭世的な思想**には批判的に接する必要がある。

【今後取り組みたいこと】

- アルツィバーシェフの創作における「女性」と「生」の描かれ方について
…多くの作品で女性登場人物は男性キャラの支配を受ける存在として登場、「女性蔑視」的と批判
⇒一方で女性の視点から「生の苦悩」を論じた作品も存在
生に対する著者の思想と、著作の中で**描き分けられるジェンダー**の関係について検討したい